A-25 甲状腺機能低下、特に低T3血症を伴う二、三の精神病に対するT3、T4補償療法の経験

杏林大・精神科
中 西 俊 雄

精神科疾患について、T4、T3、TSHを測定している。例数は138、回数は210回である。慢性分裂症では63％において低T3血症が認められたこととは既に報告した。

T3の低い慢性分裂症、うつ病、躁症状に対してT3、T4、T4+T3を投与してその作用を調めていくが、その中の代表的なものについて経験の一部を報告した。遷延性のうつの病の1例は、T4によって劇的改善を遂げたが、完全健常といえるのに到ったが、投与中止2週間後に悪化した。悪化時のT4は低値を示す。低T3を示す非定型精神病症の躁症状は、T4によって劇的改善に至ったが、中止2週間後には悪化した。再度T4を投与すれば症状も再度好転したが、中止すれば症状が悪化するのは前回と同様であった。この時点でのT4、T3は低値を示す。以上2例共、従前の治療にに戻った。T3の低い定型的慢性分裂症の36歳の男子では、T3が著効を奏し、T4の単独投与によって改善に至った。T3投与を中止して3ヶ月後に及ぶと、再び覚解状態は続いている。極めて難重な一例である。種々の治療が無効であった無為、絶然の28歳の女子分裂症はT3によって可なり好転し、投薬1～2週間後には、自発的会話や体操への参加が可能になった。投薬中止3ヶ月後も小康状態持続。2例の女子分裂症では、薬物効果、記憶障害、拒食、渴求、叫喚、攻撃等の症状が目立っていたが、T4+T3にて奏効した。

病歴7年の1例（28歳）は一時的に覚解に達した。病歴27年に及ぶ他の1例は温常にはまったが、薬物効果、記憶障害は不安。両者共に、投与中止2～3週間後には症状悪化。19歳男子、27歳女子の慢性分裂症患者では、一時、T3によって好転したかに思えたが、その後症状は戻って増悪するように思われた。

慢性分裂症のより多くの患者について、T3、T4の作用を調査したいと思う。

B-1 体幹部に発生した線維肉腫の1例

杏林大・整形外科
川上純範、河路 渡、望月一男

軟部悪性腫瘍として、比較的稀な体幹部線維肉腫の1例を経験したので、2、3の文献的考察を加えて報告する。

症例は、58歳男性で、昭和51年10月、右膝内側の膝関節大、無痛性腫瘤で発症し、昭和52年5月31日、当科初診、初診時、腫瘤は右側膝部にまで拡大しており、8×14cm弹性硬であった。他に特記すべき所見はなく、検査上も血沈の著性亢進以外には異常所見を認めなかった。軟部X線検査にて、右肩甲下角の高さに頂点をもつ卵形の腫瘍陰影を認め、超音波・Gaシンチでも陽性所見を得たため、昭和53年6月16日、腫瘍摘出術を施行した。術中迅速生体で悪性が疑われたため、可及的広範囲摘除術を行なった。病理組織学的診断にて、「Fibrosarcoma：low grade of malignancy」を得たため、術後放射線療法を3000rad計10回3000rad局所照射、化学療法としては、入院時actinomycin total 150mg投与し、昭和53年8月31日退院した。以後外来にてactinomycin 20mg/day 3日連続投与を維持して毎日行なっている。昭和53年10月現在、局所再発、肺転移もなく経過良好である。

線維肉腫は、代表的軟部悪性腫瘍の1つであり、青池班の報告（昭和46年）では、軟部悪性腫瘍411例中、47例、11.4％であり、諸家の報告とも一致している。好発部位では、四肢の結合部位、特に大腿部に多いと言われており、荻野班の報告（昭和52年）では、36例中体幹部に発生した症例はなく、またDouglas J. Pritchard, M.D.ら（1977年）によると、199例中、19例、9.5％である。体幹部線維肉腫は、四肢のものに比べて、根治的摘除が困難であることが多く、我々の症例でも、今後の詳細な経過観察が重要と考えられている。